令和５年度　学校安全総合支援事業（学校安全体制の構築）の最終報告

学校名　（　玖珠町立北山田小学校　　）

１　学校の情報

（１）　学校規模　　北山田小学校：学級数８　児童数８９人　職員数２１人

（２）　分掌の位置づけ

・防災教育モデル実践委員　１８名

・防災教育コーディネーター　北山田小学校　中村朋子

（３）　地域環境

玖珠町は、地形的に山地やがけ地・起伏斜面が多いため、地震や風水害等が発生した場合には、がけ崩れや斜面崩壊の危険性が高い地域である。その中で、北山田小学校区は、谷沿いに家々が立ち並び、昔から土砂災害や河川の氾濫による水害等が繰り返されてきた歴史をもち、防災体制の整備や防災教育のより一層の充実が求められる地域である。

北山田地区は、玖珠町の西部に位置した農村地域で、地域産業の主体をなすものは、農業・林業・畜産業である。校区には、三日月の滝・高塚地蔵・鏡山の風力発電等の名所もあり、風光明媚な地域でもある。

北山田小学校は、昭和 49 年 4 月に近隣の 5 つの小学校（戸畑小・西部小・大野原小・鏡小・栂野小）が統合した学校で、校区が広い。そのため、約３割の児童が路線バスやスクールバスで通学している。

防災に関わっては、早くから防災アドバイザーが学校教育にも参加し、５年生を中心に防災教育を進めてきた。防災散歩をし、危険箇所を記した防災マップを自治会館に掲示し、地域への啓発にも取り組んでいる。地域防災士会も 30 名からなる組織で、ふれあい食堂での避難訓練や災害ボランティアセンター開設運営訓練の実施など活発に活動している。

２　取組のポイント

本事業目標を受け、本校では、自然災害等の発生に伴う様々な危険についての理解を深め、自らの安全を確保するための意思決定や行動ができることを目指す児童の姿と定め、以下の取組を進めた。

①先進的・実践的な防災教育の手法を研究する。

②地域連携のあり方を研究する。

③発達段階に応じた防災教育の実施。

３　具体的な取組

実施時期	玖珠町教育委員会の取組	拠点校（北山田小）の取組	モデル地域内共通の取組
5月22日	北山田地区防災士会への事業説明（協力要請）		
5月23日	推進委員会への参加	推進委員会への参加	
5月24日	町校長会での事業説明	町校長会での事業説明	事業内容の確認
6月7日		職員研修（年間計画） 不審者対応引き渡し訓練の実施	職員研修
6月27日	避難訓練改善のための学校安全アドバイザーを派遣し、指導・助言を行った。	地震・火災を想定した避難訓練の実施 講師：学校安全アドバイザー・北山田防災士会	避難訓練の実施
7月14日 7月21日 ～25日	実践委員会の開催	実践委員会への参加 職員研修（児童自宅周辺の危険個所調査・通学路点検）	実践委員会の情報共有
8月2日 ～3日	先進的実践校の視察 拠点校職員・実践委員会委員（防災士）とともに、防災　教育について先進的な取り組みをしている広島市立梅林小学校を視察した。	先進的実践校の視察 町教委・実践委員会委員（防災士）とともに、防災　教育について先進的な取り組みをしている広島市立梅林小学校を視察した。 【参加人数：北山田小職員 2 人・北山田防災士会 4 人】	視察内容の情報共有
9月20日	避難訓練改善のために学校安全アドバイザーを派遣し、指導・助言を行った。	地震・火災を想定した避難訓練の実施 予告なしの避難訓練を実施した。一学期の避難訓練で学校防災アドバイザーから指摘されていた内容の改善に取り組んだ。 ・予告なしの避難訓練 ・実施後の研修会 初期消火に集まる教職	避難訓練の実施
9月21日		防災授業（６年） ・地域の祭り滝瀬楽の起こり 【参加人数：６年生 21 人】	

		 滝瀬楽の起こりを劇で発表する6年生 水害・土砂災害に備えるタイムラインの作成 講師；NPO 法人防災活動支援センター 【参加人数：6 年生 21 人】 タイムラインを作成する5年生	
9月26日	実践委員会の開催	実践委員会への参加 防災士におる先進地視察の報告とこれまでの取り組み還流	実践委員会の情報共有
9月28日	校長会での取り組み状況確認	校長会での取り組み状況確認	校長会での取り組み状況確認・情報共有
10月25日		防災授業（低学年） 防災散歩 講師；北山田防災士会 安全な場所を見つけて赤いカードを上げる低学年 だんごむしの姿勢を指導する防災士さん	
11月8日	学校安全アドバイザーを派遣し児童への指導を行った。	防災授業（５年） 講師；学校安全アドバイザー・玖珠消防署・北山田防災士会 防災散歩で説明する消防署の方	防災授業の実施
11月29日～30日	防災授業を視察し、指導・助言を行った。	防災授業（５年） 防災新聞作り 講師；大分合同新聞社 	

11月16日		防災授業（３年） 防災に対しての備え 講師；北山田防災士会 防災グッズ選びで活発に相談する3年生 防災バックの重さにびっくり	避難訓練の実施
12月1日	学校安全アドバイザーを派遣し防災講話を行った。	防災講話 地域・保護者を対象とした講演会 講師；学校安全アドバイザー 【参加人数：教職員 4 名、実践委員会委員 3 名、保護者 25 名】 	
1月23日	学校安全アドバイザーを派遣し防災講話を行った。	防災授業（４年） 地域の災害と備災 講師；学校安全アドバイザー 防災アドバイザーによる授業（地域の自然災害）	
1月26日	実践委員会の開催 拠点校での取組における成果を踏まえ、指導方法等の普及等の充実を図るため各校の管理職・防災教育コーディネーターも参加した実践委員会を開催した。【参加人数：実践委員会１５人、他校教職員１２人】 また、取り組みの成果を	実践委員会への参加 拠点校としての取り組みを実践委員会の中で発表した。	実践委員会への管理職及び防災教育コーディネーターが参加

	全教職員に還流するため、専用 HP や教職員情報共有スペースに資料を掲示し取り組みの日常化を図った。		
2月2日 2月23日		防災授業（高学年） ユレルンダー体験 子ども食堂炊き出し体験（高学年） 段ボールの防災ベッドを作成する６年 職員研修 今年度のまとめ 次年度の学校安全計画や危機管理マニュアル等の見直し	職員研修 今年度のまとめ 次年度の学校安全計画や危機管理マニュアル等の見直し

４　取組における成果と課題

（１）成果

①　先進的・実践的な防災教育の手法を研究することについて

・広島県庁と島市立梅林小学校を訪れた先進地視察は、多くの学びがあった。県庁では県の砂防関係事業について説明を聞き、ハード対策とソフト対策との両輪による人命や財産を守る取組が詳しくわかった。ソフト対策の一つである「土砂災害啓発・伝承プロジェクト」は、土砂災害に対する防災意識の醸成と、災害の事実を後世に伝えるためのものであり、啓発のヒントとなった。時間とともに風化していく危機意識を持続させ、適切な避難行動を促すための様々な取組が印象に残り、今後の取組の具体像が見えてきた。

②　地域連携のあり方を研究することについて

・大分大学減災・復興デザイン教育研究センター防災コーディネーターの板井先生の指導による避難訓練は、実践的な研修の場となった。従来通りのマニュアルに基づいた避難訓練に対し厳しい指摘を受けことは、職員の意識を変え、訓練時の考え行動する姿につながった。「避難訓練とは『先生のための訓練』である」との考えに立ち、実施の在り方について見直しを行ったことで、教職員の危機意識が高まり、「子どもの命を守る」ことへの責任の自覚と組織的な取組の構築につながった。

・５年生の「総合的な学習の時間」において、既に町の防災アドバイザーによる授業実践は取り組んでいたが、今回、地域防災士会との連携を推進した。先進地視察に４名の防災士の方々と参加できたことで、防災教育推進の思いが共有でき、発達段階に応じた防災教育（授業づくり）の出発点となった。高学年はこれまでの取組と、既に計画した学習（防災散歩・ハザードマップ作り・ユレルンダー体験等）があったので、低学年・中学年の発達段階に応じた授業を計画し、実践を進めた。防災士の方々を交えた体験活動は児童の意欲を引き出し、身近な自然災害の理解と備災意識の向上につながった。
・６年生の「総合的な学習の時間」において、これまで地域に残る伝統的な『祭り』を素材にしてきた。今年度は『祭り』の起こりが自然災害を鎮めた神への感謝であることを学び、劇にして発表する活動へと発展させた。防災の視点で地域学習を見つめ直したことで、新たな学習を展開することができ、地域連携が拡がった。

③　発達段階に応じた防災教育の実施について

・各教科の学習内容を防災の視点で見つめ、低学年は生活科、中学年は社会科、高学年は総合的な学習の時間を中心に授業実践を行った。板井先生から「防災教育は恐怖心を植え付けるものであってはいけない。故郷から逃げ出す教育をしてはいけない。」「楽しい防災教育の実践を」と言われたことを心にとめながら、体験や活動を重視した授業づくりを行った。防災散歩をしたり、カラーカード（低学年）や防災カード、実際の防災備品（中学年）を用いたりしたことで、児童の気づきが増え、活発に話し合う姿が見られた。体験や活動を通した楽しい学習こそが、子どもたちが思考し、備災の意識が高まることを、実践を通して認識した。

④　目標（めざす子どもの姿）について

【自然災害等の発生に伴う様々な危険についての理解】

・発達段階に応じた防災授業を実施したことにより、低学年は身近な自然災害を知ることができた。大雨や台風の時は、水路の水が溢れることや、山から土砂が流れてくることで通学路も危険になることを理解した。中学年は、北山田地区での近年の災害を知り、身の回りで起こりうる災害への知識が増した。特に大規模な土砂災害の実態と生活への深刻な影響について理解が深まった。高学年は、理科や社会との関連学習により、地震や自然災害が起こる仕組みを学習した。防災マップ作りで地域の危険箇所を把握し、タイムラインを作成したことで、レベルにあった避難行動を考えることができた。

【自らの安全を確保するための意思決定や行動】

・想定を変えた複数回の避難訓練により、地震時の避難姿勢を身につけ、即座に動けるようになった。秋の遠足時、町内の訓練放送に反応し、路上でシェイクアウトする姿が見られた。
・一斉下校の集まりの時に、地域の防災士さんより避難姿勢について指導を受け、練習したのも効果があった。
・小学生が日常的に取り組める備災の一つとして、命を守る３つの約束（朝ご飯をしっかり食べる・靴を揃える・寝る前に翌朝の洋服を枕元に置く）を様々な場面で繰り返し確認した。防災授業のまとめに、［３つの約束に取り組みたい］とふり返る児童も多く、意識の向上が見られた。

⑤　その他（モデル地域全体での成果）

・拠点校である北山田小学校での実践をモデル地域内の小中学校全体で共有することができた。また、各校の実践交流を行うことで新たなアイデアが生まれ自校の新たな取り組み・改善につなげる姿が見られた。

・地域のことを知らない教職員が増えていく中、地域の力を生かしながら防災教育をすすめていくことは取り組みの継続性の点からも有効であった。

・ICT 機器（クラウドでの共有）の活用は、情報共有において大きな力となることが確認できた。

（２）課題

・保護者啓発のために、防災授業後『べんきょうしたよカード』で学習内容を伝える取組を行った。児童の学びに対しては保護者も感想等詳しく書いていたが、保護者に呼びかけた防災講話への参加は少なかった。保護者の防災意識の向上が課題である。

・教科等の学習に中には、防災教育のよい教材がたくさんあるが、意識していないとしっかりとした実践にならない。来年度カリキュラムに明記したが、年度当初の確認やコーディネーターの働きかけも大事である。

・防災における地域との連携を継続するためには、しっかりした年間計画が必要である。今年度はまず実践してみることに重きをおいたが、他行事等の重なり等で計画変更もあった。確実に実践するためにも、無理の無い形で位置づけ、全職員で共有する必要がある。

・今年度は防災コーディネーターが意欲的に取り組み、関係機関や地域の防災士会等と打ち合わせを重ね実践していったが、継続するためにはコーディネーターと授業者との役割分担も必要である。

・避難訓練の時期と内容を再検討する必要がある。年度当初の早い時期に避難訓練を実施し、現状を認識することが一年間の実践意欲となる。

（モデル地域全体での課題）

・様々な状況を想定しての避難訓練を学期に１回以上（年３回）実施した小中学校の割合について、100%をめざし取り組みを進めていく必要がある。

５　今後の取組の見通し

＜玖珠町全体の取り組みとして＞

防災教育コーディネーターを中核に据えた防災教育の取り組みを行っていく。町内全ての学校において防災士会と連携した防災教育を進めるなど、関係機関と連携した防災教育と、より実践的な避難訓練の実現を図る。町内全ての小中学校・義務教育学校間で情報交換・情報共有を行い、互いに学び合い高め合う取り組みとしていく。